

悩める臨時記号

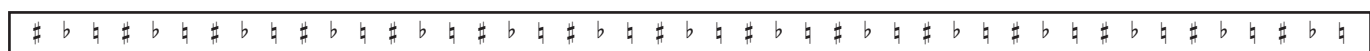


楽譜には臨時記号というものがあります。それが付けられた音に以後の小節内に限り有効で、オクターブ上下の音に対しては無効というのが現代の規則です。しかし、この規則が厳格に適用された例は、この現代の出版譜においても皆無と言えましょう。錯覚を防ぐという目的で、本来は必要のない所に臨時記号が付けられている例が実に多いものです。適切な術語がないために、これは一般に「親切記号」と呼ばれたりしますが、どう見ても unnecessary 臨時記号を「迷惑記号」と言う人もいます。

上記の譜例はギターの曲でアルペジオの練習曲です。実線矢印で示した G 音に付いているナチュラルが親切ナチュラルですが、私も含めて多くの演奏者はこの記号を歓迎するのではないのでしょうか。この譜例の1段目はイ短調で2段目からハ長調になります。この場合で G 音に付くシャープは単なる臨時記号以上の意味をもち、準調号とも言うべきか、いわゆ

る和声的短音階の象徴的存在でもあります。従って、次にハ長調に転調された時にはそれを否定する意味でのナチュラルを付けておくのは、理に適った書法と言えます。

では点線図形で示した D 音についてはどうかと言うと、直前まで2つの D 音にシャープが続いて付いているので、ここでナチュラルを打っておくのも親切かもしれません。けれどもこの場合の臨時記号は性格を異にしています。「刺繍音」と言いますが、下降または上昇してから直ちに戻るといった動き方は他にもよく見られるもので、短2度音程がよく使われます。先の例の G 音に付くシャープのような強い意味合いはありません。実制作ではいつも迷う、時には悩むことさえある事柄ですが、その判断を一任されたなら私は付けません。以上の譜例は私が普段のギター指導で使っている教則本から採ったものですが、臨時記号については出版されたままの状態を再現しました。



次の譜例もギターの練習曲の一部です。最初の段の最後の小節のオクターブ F 音に付いているナチュラルが典型的な親切記号です。直前の和声進行がト長調の終止形になっていることもあり、これは適切かと思えます。ではその2小節前の和音内の F 音についてはどうでしょうか。これも直前の和音はト長調終止形です。そしてこの部分から一時的にハ長調終止形になるのですから、もしも調性感覚に重きを置くならばここにも親切ナチュラルがあつて良いのではと思われま。ただ、ここではまた別の考え方もあります。それはこの和音が属7

であるという点に着目するものです。ジャズ系の音楽ならここで長7和音もありましようが、これは古典であるという意識を持って読むなら F ナチュラルは自明です。これも出版譜そのままですが、私はその判断を支持します。ただし、親切記号の用い方の背後にこのような音楽感覚がある以上、それは常に主観的でもあるわけで、現実の仕事でのそれはクライアントの専権事項です。校正では「在るものを削除する」方が「何かが欠けている所を探す」より易いので、やや過剰に付けてはいますが、実に悩ましい問題です。 2007年9月 梅本雅弘

